

よく耳にする「ほめる」について



左の写真の方をご存じでしょうか。大阪で「日本ほめる達人協会」を設立し、各地で講演を行い、有名になった西村という人です。その「日本ほめる達人協会」が行っている検定にほめ達検定というものがありますが、その中では「『気が弱い』『空気が読めない』といった一般的な短所を長所に言い換えてください」という問題が出題されたそうです。学校だよりでもたびたび書いている心理学という「リフレーミング」という手法に通じます。飲食店などの接客態度を調査してきた西村氏は、欠点のあら探しに偏っていたことを改め、ほめる所を探すことに力点を変えたそうです。社内でほめ合う会社ほど、従業員の働く意欲が高まり、業績の向上につながるのを見てきたからだといいます。

最近では、子育て関連の団体からも講演の要請があるそうです。心にもない「ほめ言葉」、つまり「お世辞」は、相手に簡単に見抜かれます。単にほめればよいというものではありません。「ほめる」ことは、相手の良い点を発見し、正しく評価することから始まります。

そして、そのことが「自分を見てくれている」という安心感や相手に対しての信頼となるのだと思います。「ほめる」ことは、相手の秘められた力を引き出す原動力となるのです。西村氏は、さらにほめる言葉「3S」を提案しています。3Sとは「すごい」「さすが」「素晴らしい」です。家でも学校でも子どもたちが「いいことをした」と思った時にこうやって言われることは何より嬉しいことでしょう。人をほめるには、自分にこころのゆとりがないとできるものではありません。しかし、誰かをほめることでほめた人の右脳のはたらきが活発化するだけでなく、ほめられた人の右脳のはたらきも活発化するということを知ることがあります。私たちは、人の長所をみつめる「眼」を開き、自然にほめ言葉が口から出るようになるために、まずは「すごい」「さすが」「素晴らしい」と言ってみるところから始めるといいかもしれません。間違いなく「ほめる人」は「育てる人」です。怒ったり、追及したりして責めることは誰にでもできますし、相手との関係を悪くするだけで、育てることはできません。毎日、このことを頭に置きながら私もまわりの人と関わっていきたいと思います。

6年生児童と担任集団



10日の2・3限、6年教室などを会場に夏祭りが行われました。これは6年生児童の発案から始まり、話し合いをしていく中で「自分たちだけじゃもったいないので1年生を招待しよう」となったそうです。自分だけよければよい…という風潮の現代にあって「誰かに喜んでほしい」と思い、一生懸命準備をしてくれた6

年生の気持ちを想像し、また当日の1年生にかける声の優しさを耳にし、胸が熱くなりました。そして、学期末の決して時間にゆとりがない中、6年生児童の思いを温かく受け止め、一緒に考えてくれた6年生担任集団を私は本校の職員ながら誇りに思います。